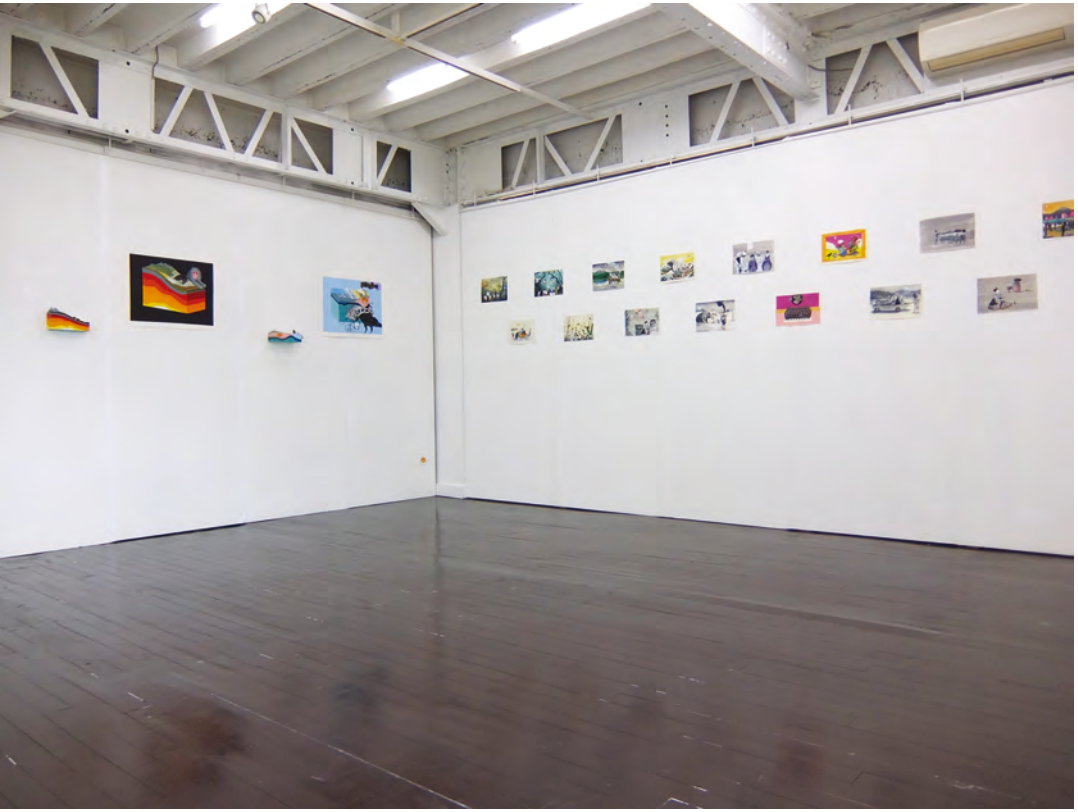
Tokyo × Kosice 2013 and from now on

欧州文化首都AIR交換プログラム活動報告 Part1



遊工房アートスペース

〒167-0041　東京都杉並区善福寺3-2-10 ／Zempukuji 3-2-10, Suginamiku, Tokyo 167-0041 Japan
Tel: +81(0) 3-5930-5009　Fax: +81-3-3399-7549　mail: info@youkobo.co.jp
www.youkobo.co.jp

KOŠICE2013 EURÓPSKE HLAVNÉ MESTO KULTÚRY　KLIR　EU JAPAN fest　遊工房 youkobo ART SPACE　文化庁文化芸術の海外発信拠点形成事業

Contents

Preface

- 海外滞在制作（Artist in Residence, AIR）活動を通して欧州文化首都から学ぶこと　遊工房アートスペース　村田 達彦
- K.A.I.R. プログラム・ディレクター アデラ・フォルディノヴァさんからのメッセージ

1. エリック・シレ in Youkobo, Tokyo

2. 洗川 寿華 in K.A.I.R., Kosice

3. 佐々木美穂子 in Plisen

4. 受入先概要

- Youkboo Art Space
- K.A.I.R.

海外滞在制作（Artist in Residence, AIR）活動を通して欧州文化首都から学ぶこと

遊工房アートスペース・共同代表　村田 達彦

プログラムのあらまし

長い歴史を持つ欧州文化首都制度の精神を与し、欧州文化首都とアジアの大都市・東京とのアーティストの相互交換による滞在制作を通した交流プログラムである。これまでの欧州文化首都に制定されている都市での現代美術についての実態は、日本ではあまり紹介されていないが、非常に魅力的な展開が見られる都市が多々ある。遊工房アートスペースでは、EU・ジャパンフェスト日本委員会の全面的な協力と支援のもと、欧州文化首都からの若手アーティストをレジデンスプログラムに積極的に受け入れるよう試みてきた。

2013年、スロバキアのKosiceが欧州文化首都としてレジデンスプログラムを始めたことから、この交換プログラムの継続運用の道が開かれることになった。これまで、ロンドン、ベルリン、パリ、アムステルダムなどで活動するアーティストに偏りがちな来日のチャンスを、他の都市を拠点とする作家たちにも広げ、彼らのキャリアアップを支援したい。また、人物を招聘し、交流の機会を持つというプログラムの特質を活かして、日本におけるヨーロッパの現代美術の公平で正しい理解の促進にも寄与したいと考え、このプログラムを通じて培った交流をネットワークとして活用し、日本から欧州文化首都へ、日本の若手アーティストを派遣する機会もあわせて実現させ、継続的な芸術交流の促進を図っていく。2013年の欧州文化首都のスロバキアKosiceのレジデンスプログラムK.A.I.Rと、東京の遊工房と、双方の都市でのそれぞれ3ヶ月間の滞在制作の体験プログラムを基本にアーティストの交換を通した交流の覚書を締結。（2012年）。2013年1月～3月、遊工房にスロバキアからのアーティスト、Erik Sille、3月～5月、K.A.I.R.に日本から洗川寿華が活動、夫々の都市にて制作した作品の展示と共に相互都市での交流が図られた。

その後の展開

交流を通した多くの成果の継承の為、KAIRと交換プログラムの継続を決定、第2段として、2013年10月～12月、日本からのアーティスト、金井学のKAIRでの3ヶ月滞在活動、2014年10月～12月、スロバキアからのアーティスト、Boris　Sirkaの遊工房での滞在活動が計画された。合わせて、2013年以降の欧州文化首都との調整も、2014年エストニアRiga、2015年チェコPilsenとの交換プログラムの可能性の検討を進めている。その一環として、2013年7月、Pilsenへ、日本からのアーティスト、佐々木美穂子をPilsenアートキャンプでの1ヶ月滞在活動の実現ができ、その後の展開の足がかりとなった。

欧州文化首都との活動のきっかけなど

欧州文化首都との関わりは、2008年リトアニアからの2人のアーティストSaulius　ValiusとDiana　Radaviciuteの遊工房での滞在制作、発表がきっかけで、翌年、2009年欧州文化首都リトアニア・ヴィルニスの機会に、EU・ジャパンフェスト日本委員会の支援を得て、両国のアーティストによる交流展「雨の太陽の出会い一虹の架け橋」が開催された。日本から12名のアーティストと2つの文化団体、リトアニアは9名のアーティストと地元の美術館などが参画、大きな成果を果たした。2010年には、欧州文化首都となったトルコ・イスタンブールからアーティストMerveErtufanの遊工房での2ヶ月間の滞在制作活動も実現した。

遊工房では、これまでに同様の主旨の交換プログラムとして、トルコ・Istanbul（2003）、北アイルランド・Belfast（2006/2007）、シンガポール（2013）との間で展開してきた。

cooperation Kosice Tokyo

K.A.I.R. プログラム・ディレクター　アデラ・フォルディノヴァ

KAIR はKosice欧州文化首都2013年のプログラムの中で重要な存在です。2010年より外国のアーティストに滞在制作施設を提供し、またスロバキアのアーティストをほかの国に送っています。KAIRは特にそれぞれの異なるジャンルの滞在制作のサイト・スペシフィックの特徴を強調します。滞在作家の中でビジュアルアーティストが多いですが、ダンサー、ライター、記者もいます。２～３ヶ月の滞在が基本の設定となっていますのでアーティストは十分に地域の社会・経済・歴史などをリサーチすることもできます。

2012年から遊工房と交渉し始め、とても意義がある成果が得られています。

この交流プログラムの第一段として、２回の審査の後、若手アーティストのErik Silleは遊工房に滞在することになりました。Erikは１月～3月の滞在中、 空虚、死、喪失を取り込む「 The Adventures of Junshi and Stillborn」という新しい絵画シリーズを制作しました。

ErikはKosiceに戻った後、PechaKuchaのイベントで滞在制作の経験をプレゼンし、現在、彼はスロバキアの首都のブラチスラヴァでの個展「Made in Japan」のため遊工房での滞在制作をもとにした作品を展開しています。

また2013年3月～5月KAIRには日本とアメリカを拠点として活動しているアーティスト洗川寿華が滞在しました。Kosiceの都市空間、特に高層ビルの団地にインスパイアされ、作品にその印象とともに、絶えず移動しているという感覚を反映しました。最後の成果発表は「Meet Me in the Middle」というタイトルで廃虚の工場のホールで行われました。

両方のレジデンスはEU・ジャパンフェスト日本委員会の支援を受けていますが、当メンバーが洗川寿華の展覧会会期に、Koscieを訪問しアーティストと交流されました。

2013年後半は、日本のアーティスト金井学が10月～12月までKosiceに滞在することになりました。また2014年にはスロヴァキアのBoris Sirkaが遊工房のレジデンスプログラムに参加します。両国とも双方の国に興味を持ちレジデンス参加に多くの積極的なアーティストがいますので、今後も継続的な協力関係ができれば喜ばしく思います。

ERIK ŠILLE
エリック・シレ

遊工房アートスペース/私の滞在記

私は今、この文章を書きながら、いったいどのように遊工房で3ケ月間を過ごせば良いのか見当もつかなかった1年前の事を思い出しています。書くことが得意ではない私ですが、滞在中に起こったことすべてを書きたいと思います。私は、欧州文化首都のKAIR（コシチェ-アーティスト・イン・レジデンス）を通じ、遊工房のレジデンスプログラムに申し込む機会を得ることができました。当初は躊躇していましたが、妻の強い説得により、作品と動機に関する短い文章を作成し提出しました。私にとって日本を選択したことは偶然ではありません。私はあらゆる点で日本文化のファンでしたし、日本の歴史や料理ならびに日本の絵画や美術も称賛する一人でした。私の作品には、日本文化の際立つ特徴がしばしば見られます。そして、数週間後、吉報が届いた時は、本当に嬉しかったことを覚えています。準備に充分な時間は取れませんでしたが、今となっては、とてもポジティブな出来事だったと思います。旅立ちの為に、6週間以内に今まで想像した事の無いことに備える準備をしなければなりませんでした。もちろん助成金を得る時間もなかったので、このような機会を与えてくれた遊工房、EU Japan Fest,そして日本政府の支援にはとても感謝しております。

日本そして遊工房への到着。異なった文化、国、習慣など、全てが新しい経験から始まりました。村田達彦さん、弘子さん、遊工房スタッフとの初めてのミーティングで、積極的な印象を受け、思っていた以上に全てが順調に、期待に満ちたものに感じ始めました。

3ケ月間過ごしたAIR2はとても過ごし易い施設でした。広々とした住居施設であるレジデンス2は、生活に必要なものが全て整い、ギャラリーの上に在るスタジオ2も完璧でした。

達彦さん、弘子さんと一緒のチームはいつも献身的で、また全ての事を楽しんでいました。遊工房到着後直ぐに、レジデンスの規則、使用案内、ゴミのリサイクル方法等を教えて頂き、遊工房周辺を散策しやすいよう、イラストを交えて作成された地図を受け取りました。

遊工房周辺は(杉並区)とても印象深い地域で、よく公園を散歩したり、走ったりしたものです。日本の自然や環境との関係性にはとても心を打たれ、我々ヨーロッパの人々と比較すると、とても繊細なアプローチをしていると感じており、敬意を払っています。

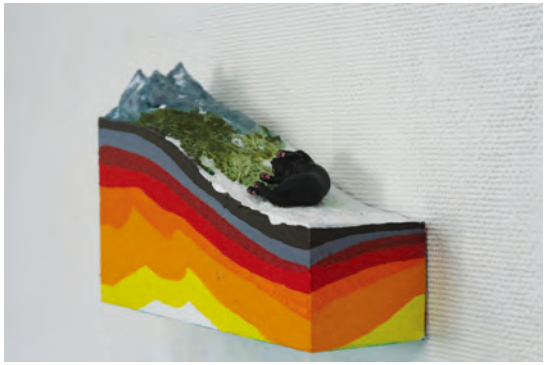
同じことの繰り返しになってしまいますが、遊工房チームはあらゆる状況や疑問点において非常に献身的でした。私はいまだに彼らを友人以上の存在だと確信しています。

作家である私にとって、アーティスト、ギャラリー訪問者、地域住民と会談はとても胸に迫るものがありました。議論やｸﾘﾃｨｰｸｾｯｼｮﾝ、そして展覧会開催中にギャラリー担当スタッフから受けたインタビュー等は非常に有益で、彼らのアプローチは常に人と人との関

わり合いの上で、プロフェッショナルなものでした。さらに、同じ時期遊工房に滞在していたアーティスト、ニコラス・バスティンという新しい友人に出会うことも出来ました。

達彦さんと弘子さんは、しばしば作品を制作している過程にあった私を様々なイベントやオープニングに連れ出してくれました。そのおかげで、東京の文化的な生活をよく知る所となり、仕事だけでなく伝統的な機関から現代アートのオープニングまでと幅広く文化を探求することができました。遊工房の人々は、自由な時間を私と過ごすために費やしてくれ、夕食に招待された際は、日本食を称賛する一人としてとても楽しい時間を過ごすことが出来きました。そのような日々を思い出しては、とても感謝しています。

横浜、鎌倉を訪れた際には、いくつかのギャラリー・オーナー、アーティストを紹介して頂きました。滞在中、私は、日本とヨーロッパの文化を混ぜ合わせる事に時間を費やし、社会問題に向き合う表現をすることに挑戦しました。本来、大きな作品を描く画家である私は、十分な時間がなかったので、より深く文化を知り、働きかける機会を持つ時間を確保する為、紙の上に通常より小さいサイズの絵を描くことにしました。



まるで日記の様な、より小さい形式を用いることが、日本の日常生活から生まれる “象徴”を印象的なものにする為に、非常に有効なのではないかと思えたのです。

日本社会の中に存在する純粋性、多様性、そして秩序は、私に沢山の物をもたらしました。マスメディアとの関係や、国の伝統とともに消費主義と繋がる日常生活。私は、それらを青木が原の樹海と照合したのです。

滞在期間中、私は、テクノロジーを用いた作品、紙上またはキャンバスにアクリル絵の具で描いた作品、コラージュ作品、そして２つの立体物を含め48の作品を制作しました。

遊工房アートスペースでの滞在は、私のプロフェッショナルな生活にとって取り巻く環境は、非常に有益なものであり、ギャラリー来訪者の方々との議論は、異なった文化背景を持ち併せた他の国での印象と同様に有益でした。

私は自身の作品を異なった角度から批評し、いままで決して挑戦してこなかった方法を見つける事が出来、更に、好意的な環境も与えて頂けたのです。

最後に、このような機会を得たことは私とって非常に名誉な事であり、将来、出来るだけはやく再訪したいと望んでいます。

エリック・シレ

The adventures of JUNSHI and STILLBORN

、、、青木ケ原へ行く道の途中、その始まりにあっても終わりにあっても、私達はここにはいないのだ。

エリック・シレは、活動の初期の頃から、いわゆる消費文化、大衆文化、視覚的メディアの表現、手法、テーマといった手段に魅了されているのが特徴である。ワイルドで狂った今日に溢れるイメージからの要素を彼の作品に認めるのは容易い。また、コミック、アニメーション映画、インターネット、コンピューターゲーム、ストリートアート、グラフィティ、タトゥー、包装デザイン、広告の創造性、娯楽のビジネス、政治的プロパガンダ、そして玩具などプラスチック製品の繰り返されるデザインまで、彼の幼少期のあらゆる視覚的環境の要素もそこに認められるだろう。

近年、グローバルな美術の環境的な歴史や、自然科学の視覚化の拡大と、変容の視覚学へと、平日的な出来事を変換し、流用し安く使い勝手が良いスペキュタキュラーな言語を生み出してきたエリックが、今回のこの「カタログ」を構築した。彼が作品を選定し、絵画の構図として解決をみるこれらの要素を統合する上で基本となるのは、特に自然と結びついていることである。それは、人類を取り囲む自然環境だけではなく、人の一生の最後の局面を超えた、歴史の精神的で文化的な側面の物質化への理解に基づいている。

同様に明らかに、典型的な「シレ流」のペインティング技術を見出すのは可能である。例えば、滑らかでクリアな表面のキャンバスに施されたアクリルペインティングは、柔らかな筆を用いたドローイングのようであり、幾何学的な痕跡という印象を与えると言える。純粋さと厳密に計算された完成品は、計算されているようで実は表現の記録からなる事故的に表面を形付られたペインティングのプロセスと、拘束されない汚染という強いコントラストの中に、強調される。近作では、「毎日のペインティング」の形で親密で私的な記録を残すためにそもそも使っているわけだが、シレはますますアクリルペインティングの技術を多用している。オブジェとしての充足は彼にとっても例外ではなく、それは彼のペインティングから数学的にそして構図的に由来している。

絵を介したストーリーテリングは、エリック・シレの作品に固有で特徴的な特質である。様々な動物やコミック本のキャラクターがストーリーの語り部となる。シレのペインティングに登場するキャラクターは、彼らが置かれるクリアーで理想的な世界—または状況や既存のオブジェーとは矛盾する状況にあることに気づく。状況は少なくとも間違っていて、さもなければ病理的である。キャンバスは、幼稚なナイーブさ故のしつこい甘ったるさと、子供っぽい紛い物の純粋さと、良く出来た世界の興奮状態のハーモニーを発散している。その眩しさの影には、描かれた状況や語られるストーリの持つ残虐さ、生臭さ、荒々しさ、浸透性が潜んでいる。

ノロ・ラッコ
Noro Lacko

ERIK ŠILLE
エリック・シレ

born in Rožňava, Slovakia, EU

Solo exhibition

2013 The adventures of Junshi and Stillborn, Youkobo art space, Tokyo, Jp
2012 Erik Šille – welcome to our city ,Stredoslovenská galéria, BB, Sk
2012 From time to time, from shore to shore, Industrial Gallery Ostrava , Cz
2011 Alchýmia vandráctva, Turiec gallery v, Martin, Sk
2011 Noir wellness,Krokus gallery, Bratislava
2010 Erik Šille, Wannieck Gallery Brno, CZ
2010 Erik Šille, Another country , Galérie Sýpka, Valašské Meziříčí, CZ
2009 e.s. wird hell, Krokus Galéria Bratislava, SK
2008 Erik Šille. New world pictures , Galéria SLSP, Bratislava, SK
2008 Paintings feels better than we do, Galérie Blansko, CZ
2008 Horor Vacui (s/ with M. Czinege), Slovak Institute Rom, IT
2008 a. balanced, Múzeum Vojtecha Löfflera, Košice, SK
2007 Birds resonance, Bastart Gallery Bratislava, SK

Group exhibitions

2013 Podozrivý volný čas, Open gallery , Bratislava
2012 OLTÁRE SÚČASNOSTI – SÚČASNÉ OLTÁRE, Turčianska galéria , Martin
2011 Punctum, Gallery 19, Bratislava
2011 ObraSKov, Wannieck Gallery Brno, CZ
2010 Painting after painting, Slovak national gallery SK
2010 Selfportraits, Krokus Galéria, SK
2010 Faunetic-Faunethic-Faunatic, Kro Art Gallery Vienna, AT
2010 Entdeckung der Langsamkeit, Kro Art Gallery Vienna, AT
2010 Formate der Transformation 89-09, MUSA Wien, AT
2009 Formáty transformace 89-09, Dům umění Brno, CZ
2009 Contemporary drawing, Košice /Praha/Budapešť, Kulturpark Košice SK
2009 Selection 11.1, Galérie Václava Špály Praha, CZ
2009 11 + 1, Dom umenia Bratislava, SK
2009 donumenta 2009, Perfect Asymmetry, Kunstforum Ostdeutsche Galerie Regensburg, DE
2008 Spleen & ideal, Karlín studios, Praha, CZ
2008 „2 dollar 4 all we are so small", Bastart Gallery Bratislava, SK
2008 International Triennial of Contemporary Art, National gallery Prague, CZ
2008 Im Herzen Europas, Kulturzentrum Englische Kirche Bad Homburg, DE
2008 CZ – SK: Young Contemporary Painting, Wannieck gallery Brno, CZ
2007 PitoreSKa, Wannieck Gallery Brno, CZ
2007 Triennial of painting, Museum Tarii Crisurilor Oradea, RO
2007 Spleen & ideal, Galerie Brno, CZ
2007 Skúter – Bienniale of young slovak art, Jan Koniarek Gallery Trnava, SK
2007 PRAGUEBIENNALE 3, Karlín studios Praha, CZ
2007 The Most Curatorial Bienniale of the Universe, apexart, NY, USA
2007 Triennial of painting, Deri Museum Debrecen, HU
2007 Vitamin Painting, Bastart Contemporary Bratislava, SK
2006 Zlin Youth Salon , KGVU Zlín, CZ
2006 City X, Galéria Jána Koniarka Trnava, SK
2006 "Contemporary Art from Slovakia" European central bank Frankfurt am Main, DE
2006 Fresh Europe Art, KOGART, Budapest, HU / Brusel, BEL

Erik Silleオープニング

洗川寿華
Juka Araikawa

コシチェ 2013

スロバキア第２の大きい都市であるにも関わらず、コシチェは遠く離れていると感じる。飛行機でのアクセスが限られており、ウイーンからの6時間の列車の旅から始まった。

国の農村地帯を走る昔ながらの列車に乗った。ブラティスラバから小さな町や村を通ると、景色が段々と異質になってくる。小さな箱の様な住宅が広い土地に建てられていたり、幾つかは個人農場みたいに見える。日本と似て、土地の境界が入り組んでいる感じで点在している。

疲れていたので、夜遅くにコシチェに到着するまで、寝たり覚めたりうとうととしていた。疲労と空腹の汽車の旅は、アデラさんとズズカさん（KAIRのディレクターとプロジェクト・マネジャー）の駅の出迎えで無事終えた。宿泊先まで案内してもらい、ルームシェアのウクライナの若手アーティストにも会った。暗くて、未だにコシチェはどういうところか分からなかった。でも外が日本の冬と比べてもっと寒いことを知った。

翌朝起きたら、窓の外からはるかに続く団地群（共産主義時代の住宅街区）が見えた。それらは、同じ大きさと形で、色で分別できるが、全てが抑えた色の団地群であった。外へ出ると、塩のような粉雪と乾燥した風が吹いていた。本当に未知の場所に足を踏み入れたのだとおもった。期待感と不安とを同時に感じ、コシチェが自分の作品にどういう影響を与えるのかを楽しみながら、都市を探求す用意が出来た。

私のスタジオは、都市の中心地・ハラヴナにあり、宿舎とは路面電車ですぐの距離にある。郊外の団地群から都市の中心へ移動する風景の変化を路面電車に乗って見る楽しさがあった。歴史的な建物と教会のど真ん中に建てられたショッピング・センターのすぐ外が電車のターミナルで新旧の混ざり具合が面白かった。

KAIRは、旧タバコ工場であったと言われていた建物を使って、三つのスタジオを運営している。この大きい建物には、スタジオ、ギャラリー、ダンス・ホール、教室、店舗などがある。この集合体と私の団地群の中にあった宿泊先が、活動の拠点となった。展覧会までの滞在期間に、スタジオと家へ、異なった道筋を選んで都市を探求していった。

通っている間に、都市に散らばっている共産主義の時代に建てられた記念すべき建物に気づき始めた。多くの建物が、落書きで損なわれたり、環境で傷ついていたり、或いは一部が紛失していた。（価値のある金属の部分が盗まれて、お金に代えられたからだろうー世界中にある公共のアートが抱えている課題でもある）台しか残っていないものもあった。現代社会では、これらの彫刻は無意味であったようだが、都市開発が盛んになっているコシチェで、これらの歴史的な跡を見かけるのは興味深かった。

コシチェの多くが、新築、或いは改修中だ。7月に開業したクンストハレは、EUが支援している大規模プロジェクトの一つである。1950年代に建てられた水泳プールであった建物が、多目的エキシビション・センターに改築された。今年の秋に完成されるもう一つの大きなプロジェクトには、旧オーストリア＝ハンガリーの兵舎が文化センターへと改築され、KAIRのオフィスとスタジオを移動する予定である。旧ソ連・スロバキアはまだ新しい国であり、これらの発展が進んでいることが刺激的だった。

仕事の後に、滞在アーティストとスタッフが「タバチカ」という、スタジオの近隣にあった展示とライブが開かれる飲み屋でよく集まった。タバチカは、コシチェが欧州文化首都に選ばれる前に始まり、コシチェのアート界にとっての要になっている。KAIR、そしてアーティスト・コミュニティの実際を学んだ場所も、タバチカであった。

KAIRは、アーティスト・トークと多数のオープン・スタジオを開催し、また、各アーティストに作品制作に当たってアドバイスする学芸員もいる。3ヶ月のレジデンスはあっという間に終わるので、環境に反応する作品を展開させるために、学芸員との対話が不可欠である。展示空間を探すサポートや、日常生活（例えば携帯電話を手に入ること）や、材料の購入、展示空間を見つけるサポートをしてくれるプロジェクト・マネージャーの協力もある。コシチェでは、画材を手に入ることが難しく、プロジェクト・マネージャーのサポートが非常に貴重であった。KAIRの優れたコーディネーションの例が、毎日スタジオへ上がる階段の途中にもあった。それは、オランダ出身のアーティスト、マティス・リーシャウトが、古い兵器を分解し、スタジオのある旧タバコ工場の周りをくねらせた木製の格子状の建築構造として使い展示品としたものである。

コシチェでの滞在制作は、地元や海外からのアーティストと会う機会、アーティストのためのサポート・ネットワーク、そして、コミュニティの大切さを知る大切な経験となった。日本とアメリカで身近となった自分のアート（コンテキストと材料、両方に関して）と、コシチェにいるアーティストの制作した作品の大きな違いを知ったことで、ますます東ヨーロッパを探求したくなった。コシチェとKAIRのレジデンスは、広く新進アーティストに刺激を与える価値のあるものだ。

Juka Araikawa - Meet me in the middle

自身の作品の中で、また作品を通して、洗川寿華は場所との関係性、そしてその関係性が個人的に或いは集団的にどのように影響し合うかを探求しています。これら関係性は、どのように現れ、静まり、重なりあい、そして互いに浄化し合うのか、その繋がりが何を表すのか、我々の中に何を残すのか。　空間的に（例えば、2008に作った「Nordic Experience」や「Bird Park」の絵画で見てとれる室内と野外の環境の関係と、どのようにその環境を構築しているのかの問い）時間的に、どのように旅を通して場所が結合されるのかがコシュチェで制作された洗川の作品の基礎にあります。

「Meet Me in the Middle」では、旅は場所とその場所での体験との関係性をどのように構築するのかを探求しています。関係ない場所が人の移動によって結び付けられ、旅によって散らばり、私達の周りに様々な場所が集められます。また突然全く異なった場所、地理的にも雰囲気的にも離れた場所を、作品の文脈に落とし込んでいます。

L.A.で美術を学んだ日本の画家洗川寿華の、東ヨーロッパの都市にある高層団地に滞在中制作した作品には、初めて体験した場所であるのに、過去に体験した場所を思い出させるような雰囲気があります。「panelák」のアパートの部屋の壁のペンキの匂いの中で、ベランダの上の雪の質感の中で、団地の正面で過去の場所を引き出しています。

「Meet Me in the Middle」では旅（確かな過去、現在、未来を持つ場所の移動）が作品の軸となります。作品は四つの部分で構成され、中心軸の周りに繋がれます。三つの壁には絵画が設置され(タイトルはそれぞれ"St10 K", "I'm Drunk" and "GOOD NIGHT")、インスタレーション(タイトルなし)もあります。空間を使うインスタレーションの中に洗川が画家であるということがよく見てとれるのは、その中に絵画のような表と裏がちゃんと分かれているといった平面的な特徴があり、平面の風景の中で過去と現在の場所との繋がりが見えてくるような仕組みがあるからです。

Juliana Sokolová

洗川寿華
Juka Araikawa

b. 1984, Yokohama, Japan

Education:
University of Los Angeles, California, School of the Arts and Architecture, BA

Group Exhibitions:
2013 Storytellers and Mystics, Art Connects New York, Brooklyn, NY
2012 Open Studio, Warehouse Project, Yokohama
2012 歩く絵のパレードin 寿町, Yokohama

2012 Curatorial Exchange, Irvine Fine Arts Center, Los Angeles, CA
2012 Radio Show, Midori.so, Tokyo
2012 Pleased To Meet Me, Warehouse Project, Yokohama
2012 T/here, Youkobo artspace, Tokyo
2010 New Paintings, Foxriver, Singapore
2010 Tectonic Plates, The New English Gallery, NY
2009 First Look: An Exhibition of Emerging Artists From Los Angeles Galleries, House of Campari, Los Angeles, CA
2009 Living History, Marc Selwyn Fine Art, Los Angeles, CA
2008 Black Dragon Society, Los Angeles, CA
2007 Billy's Coffee Shop Brunch, INMO Gallery, Los Angeles, CA
2007 No Art Today, INMO Gallery, Los Angeles, CA
2006 New American Talent- The Twenty-First Exhibition, Arthouse at the Jones Center, Austin, TX
2006 Five Easy Painting, 962 Chung King Rd., Los Angeles, CA
2006 Not This Time, Shangri-la, Beijing, China
2006 Henry Painter, Bronson Tropics, Los Angeles, CA
2006 Boroughs of Los Angeles, William Grant Still Art Center, Los Angeles, CA

Solo Exhibitions
2013 Youkobo, Tokyo (Forthcoming)
2013 Meet me in the middle, Košice, Slovakia

Awards
2006 Smith Scholarship, University of Los Angeles, California
2005 Lillian Levinson Scholarship, University of Los Angeles, California

Other
2013 K.A.I.R Kosice Artist in Residence, Slovakia
2012 BankART AIR Program Open Studio, BankART, Yokohama
2006 Residency at Red Gate Gallery, Beijing, China

洗川寿華オープニング

佐々木美穂子　2013年７月、チェコ共和国プルゼニにて

Mihoko Sasaki

はじめに

チェコ共和国のプルゼニにある美術大学で開催しているサマースクールに参加してきました。サマースクールの名前はArtCanp2013です。そこでは世界中から集まった参加者が国際色豊かな先生方の指導のもと様々な物作りを体験していました。私はそこで三つのコースを受講してきました。 日本で生まれ育ち日本の大学で美術を学んでいる私が、初めて海外に滞在しながら制作をした中で学んだ事、感じた事、思った事、考えた事等を記します。

美術教育の違いについて

私が日本で受けている美術の教育とプルゼニのArtCampで受けた教育とでは、一方は美術大学での内部生への教育であり、もう一方は美術大学での外部の人への教育ですので、そもそもの目的が違うため単純に比べる事は出来ませんが、ArtCampで実際に授業を受けた印象や他の内部の学生と内部の先生とのやり取りを見ていて、先生と生徒という関係に日本との違いを感じる事がありました。

ArtCampでは先生と学生のお互いの目的がはっきりとしていて、ビジネスのような関係に近いように感じました。先生は大学からお給料をもらうかわりに生徒を育て、大学の評判を上げるという目的があり、学生も授業料を支払う代わりにそれに見合う授業を要求しています。ArtCampでは学生に知識や経験をたくさん持ち帰らせる事ができるようにと、たくさんの課題が用意されていました。授業内で行う課題としては、日本の4～５倍ほどの量だと感じました。

それと比べると日本ではどちらかというと、教える、ということよりも、自ら気づかせ身につかせるということに重きをおいているのではと考えましたました。

日本から来た参加者

「東の果てからわざわざこんなところに、君はなぜ来たんだい？」と色々な方に聞かれました。私が「2015年に欧州文化首都になるプルゼニという街を見に来ました。」というと、皆さん一瞬はっとしてから納得してくれました。欧州文化首都が日本でも知られている事にはっとしたようでした。

そして私が話をしたほとんどの参加者は日本に是非行ってみたいと言っていました。日本では街行く人は誰もが奇抜なファッションに身を包み、何もかもが自動で動くネオン輝く街がありながらトトロの森のような自然があり、人々は落ち着きがあり礼儀正しい、と

彼女たちは私に話してくれました。日本のアニメやテレビで紹介される日本のイメージが元になっているそうです。彼女たちにとって日本は少し変わっているけれど魅力的な国だそうです。「日本人は何でも豆なのよね！みそや醤油等の調味料も、豆腐等の主菜も、あんこ等のデザートまで！身体に良いのよね！テレビで見たわ！」という話をされた時は、私もなるほど変わった国だなと思いました。そんな東の果ての国から一人できた私のことを、みなさん優しく接してくれました。

語学について

ArtCampではチェコ語と英語が主に使われます。しかし参加するために語学のレベルを明確に求められる事はありませんでした。私自身は、聞いて理解することはできますが話すことにはあまり自信がありませんでした。しかし、話さなければならない環境に飛び込めばなんとかなるのではという根拠のない自信とともに参加してまいりました。

ArtCampにはチェコ周辺の東ヨーロッパ圏の参加者が多く、彼らはあまり英語が得意ではないようでした。それが幸いしたのか、お互いに足りない語彙量の代わりに身振り手振りでコミュニケーションをとる事が出来ました。また、英語の堪能な人とコミュニケーションをとろうとする時、私のレベルを相手が察知し、私が答えやすいよう易しい英語を話してくれました。コミュニケーションをとる上では、伝えたい内容がはっきりある事と、相手の言いたい事を汲み取ろうとする姿勢がお互いにあることが、語学よりも大事なことなのだなとおもいました。想いや考えが伝わったときはとてもうれしかったです。そして今後はもっと深く理解し合えるよう語学を磨きたいと心から思いました。

海外で滞在制作するという事について

普段の場所と文化も生活も気候も異なる場所で制作をするということは始めは大変だと思います。その初めての海外滞在制作で様々なサポートの充実したArtCampに参加できたことはとてもとてもありがたいことでした。三週間の滞在期間を安心しながら、人とのコミュニケーションや、街を見て文化を理解することや、毎日の食事などの生活を整えることで時間を過ごしました。短い間ではありましたが日本では当たり前のようにしていることをもう一度見直す機会になり、とても良い時間でした。過ごした時間で感じ考えたことは今後の私の作品制作に良いように影響してくると思います。そして、おちついて作品を制作するという環境になるにはもっと時間が必要であったと思います。今回の経験を活かし、次回のさらなる長期滞在制作につなげより深く作品制作が出来るよう今後も頑張りたいと思います。

今回ArtCampに参加させて頂くにあたりお世話になりました皆様方に心より感謝致します。ありがとうございました。

佐々木美穂子 1987年東京生まれ 東京芸術大学博士課程在籍中

受入先概要

遊工房アートスペース

遊工房アートスペースは、展覧会、ワークショップ、講演会などの活動を通し、幅広い視野に立つ国際交流、異文化理解の「場（スペース）」を提供している。特にアーティスト・イン・レジデンス・プログラムは、アーティストが東京という魅力的な都市に滞在しながら活躍を広げる「機会」をつくると共に、多様な分野のアートを地域の人々が身近に触れる場であり機会にもなっている。これまで十数年にわたり、滞在、制作、発表の3つの機能と空間を活用したアーティスト・イン・レジデンスや展覧会などを通じて、国内外のアーティストの活動支援と共に、地域の都立公園を活用した野外アート展、「トロールの森」、子どもとアーティストとのワークショップ、「アートキッズ」をはじめ、コミュニティとつながるアートの活動も継続的に行なっている。

ヴィジョン
遊工房アートスペースは、多様な創作活動に応える実践の場となることでアーティストを支え、アートの社会的な役割とその重要性を提示することを目指しています。

バリュー（核となる価値観）
・開放性と交流：
アートは広く開かれるものであると同時に、異文化の人々のコミュニケーションと理解を育てるために必要なツールであると考えます。
・フレキシビリティー（柔軟性）：
アートとアーティスト活動の本質に対して、私たちの活動はフレキシブルな取組み方が不可欠であると認識します。
・自律性：
コミュニティや他の組織と強固なネットワークを保つことを大切にしながら、アーティストと遊工房自身の個性と多様性を維持します。

youkobo ART SPACE

K.A.I.R.

In September 2008, the city of Košice the title of European Capital of Culture with its Interface project.

The greatest emphasis of Košice 2013 organization the development of creativity, civic participation and community development, as well as the development of human potential in the city. Continue to work closely the institutions responsible for tourism development at the regional as well as national level.

We support creativity – this is the main message of the project and the new vision for Košice. Thanks to the Interface project and the ECOC 2013 title, the city shall also become the centre of creativity and a new future for young, creative people who wish to live and work in our city, which is their home.

One of the key projects of Košice 2013 is K.A.I.R. Košice Artist in Residence which fuels and support artistic mobility and exchange. Since 2010 there have been around 30 international artists hosted in Košice and about 20 Slovak artists have travelled abroad for two or three month long residencies with the aim to create site specific artworks dealing with local issues and reflecting the experience of the artists gained during the residency.

Lost Exhibitions
Vadim Tziganajs/Moldova

Mirage
Susken Rosenthal / Germany

Living room
Clare Dantzer / France